

シンポジウム

『高い志 豊かな心 切り拓く未来』

コーディネーター
富吉 賢太郎 氏



シンポジスト



中島 潔 氏



坪田 信貴 氏



竹下 真由 氏



シンポジウム

コーディネーター 富吉 賢太郎 氏

午前中の記念講演、緒方孝市前広島東洋カープ監督の興味深いお話がありました。Bクラスに落ちたチームをAクラスに引き上げるためにはどうすればいいか。緒方監督が指揮官としてやったことは、全試合の映像を見て、そこから得た情報を徹底分析することで、次のシーズンに臨んだということでした。また、監督とコーチ、トレーナー、スコアラーの関係において、それぞれ権限を委譲したことなども紹介されましたが、これは学校現場における組織マネジメントにも参考になる内容でした。



さて、佐賀は昔から教育県・佐賀と言われていました。いつの時代から、そうなのか。そして、なぜ、そう言うのか、思うのか！一言で明快に説明するのは、なかなか難しいのですが、一つだけ言えるのは、江戸の後期、17歳で家督を継ぎ10代藩主になると様々な改革を断行し、佐賀藩を幕末の雄藩にのし上げた名君「鍋島直正」の存在があるのではないかと思います。直正公は、佐賀の近代化だけでなく、教育にも力を入れ、学ぶ意欲のある子どもは、親の身分は問わず、藩校「弘道館」で学ばせ、子息の成績によって父親の禄(給料)を決定するというように、徹底して勉学を推奨したとされています。

そしてもう一つ、戦後の教育改革において、佐賀の旧制中学の教師であった大島多蔵氏が県選出国会議員として、戦後初の国会において教育の大切さを熱弁。この大演説が今の義務教育制度(6・3・3制)のもとになったというエピソードも知っておいてほしいと思います。

教育は国の宝、子どもたちは未来を担う社会の宝物です。今日のシンポジウムでは、こういった先人の偉業、思いを今に重ねながら、これからの時代を生きていく子どもたちにとって大切なものは何か、皆さんで考えてみたいと思います。

(1) 「高い志 豊かな心 切り拓く未来」について



それでは、中島潔さん、坪田信貴さん、竹下真由さんの順にお願いします。

それでは、まず、3人のシンポジストの方にそれぞれ、自己紹介も含めて、今日のテーマについて、自由に思うこととお話していただきたいと思います。では、中島潔さん、坪田信貴

(2) 持続発展可能な社会の担い手として育つための人づくりや学校は、どうあるべきか、「学校教育とくに副校長・教頭が担う役割」等について

それではシンポジウム第2ステージとして、これから変化の激しい社会を、たくましく、心豊かに生きていく子どもたちを育てるには何が大事か。また、これからの学校、教育はどうあるべきか、特に、今日、参加いただいている副校長、教頭の役割など、子どもたちや先生たちへのメッセージを中島潔さん、坪田信貴さん、竹下真由さんの順にお願いします。

シンポジウム

(3) まとめ

1964年、今から57年前、アジアで初めてのオリンピックが東京で開かれました。この時、日本は戦後復興を全世界にアピール、世界中を驚かせました。まさに「奇跡の成長」だと世界中が驚き、賞賛したのです。その日本の奇跡の成長の原動力となったものが3つあると言われます。①教育がしっかりしていたこと②志を持った優秀な官僚たちがいたこと③日本人は勤勉であったこと。「教育」と「官僚」と「勤勉」。この三つが、日本が世界に誇る日本の三本柱でした。今日のシンポジウムは、かつて誇った日本の三本柱から、新しい三本柱を私たちの手で作っていきたいと思いますが、そのためのヒントがいくつもあったと思います。

私は地元の新聞社で一面コラムを10年以上書いていました。1羽のニワトリが1日1個の卵を産むように、1日1本のコラムを書く。そんな中で、いろんな人との得がたいご縁がありました。今日のシンポジウムのキーワード「志」「夢」「生きる」「育む」・・・そんなキーワードに似合う人物、ノーベル賞受賞者である小柴昌俊さんと実際にお会いしてお話を聞き、感動して書いたコラムを紹介して、まとめに代えさせていただきます。

ノーベル物理学賞受賞者の小柴昌俊さんは、一瞬にして人生の夢をあきらめなければならぬなあーと思ったときが一度だけあったそうだ。

◆1926年生まれの小柴さん。子どものころの夢は軍人か音楽家になることだった。時代が時代だから、当時エリートだった軍人になることは両親や周囲の期待にこたえることでもあったのだ。ところが中学1年の秋、ポリオ（小児まひ）にかかって両手両足が不自由になり目の前が真っ暗になった。これでは軍人にも音楽家にもなれない。

◆でも気持ちを切り替え、療養しながら小柴さんは模型飛行機屋にでもなろうかなあーと考えた。模型飛行機屋なら、家にいて、模型を作りながら学校帰りの子どもたちが来るのを待っていればいいーと。しかし、いざ、学校を休んで毎日一人で家にいても面白くない。しょうがないから、暫くたって学校に行こうと思い直し、片道4キロの道を足を引きずり、這うようにして毎日、学校に通ったそうだ。大変だったが、これがいいトレーニングになって足がだんだん使えるようになったという。

◆しかし、どうしても、仲間から遅れてしまう。遅刻ばかり。でも、ある日、みんなから遅れてやっと校門に着いたとき、自分が登校してくるのをいつもじっと気に掛けてくれている先生がいることに気がついた。小柴は、その先生が大好きになった。懸命に学校に通い、勉強した。

◆小柴さんの自伝的エッセー『やれば、できる』（新潮社）にもあるが、軍人への道が閉ざされた結果、物理の世界で大輪を咲かせた小柴さんの、そんなものの考え方と生き方は学ぶことがいっぱいである。湯川秀樹博士以来の、わが国のノーベル賞学者に対するイメージを変えた小柴さんの「やれば、できる」。単純にして明快なメッセージである。

「高い志 豊かな心 そして切り拓く未来」

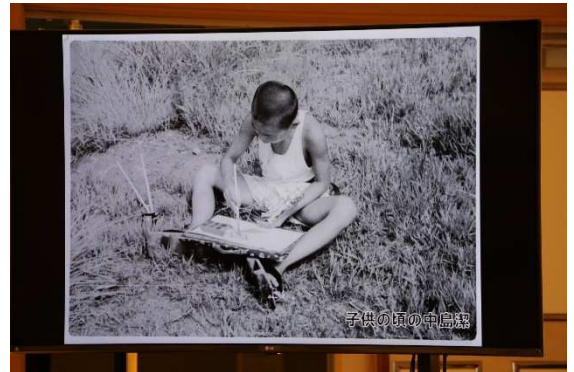
登壇していただいた3人の皆さん、今日は本当に素晴らしいメッセージをいただき、ありがとうございました。参加された先生方のこれからの実践、取組に期待し、シンポジウムを閉じたいと思います。



シンポジスト 中島 潔 氏

(1) 「高い志 豊かな心 切り拓く未来」について

私は伊豆下田の金山で温泉を掘る仕事をしていましたが、つらい仕事だったので、1日のうちで自分の好きな時間を持つとしました。それで絵を描くことにしました。当時は、6畳に5人住んでいましたが、布団の中にもぐり、小さな紙に仲間の足のうらを描きました。それが楽しくてこれで生きていきたいと思うようになりました。そんなとき、仲間がワイヤーに巻き込まれ、大けがをしました。自分も手を失いそうなけがをしそうになったため、仕事をやめ、東京に出てきました。広告代理店から声をかけてもらい仕事をしました。徹夜ばかりでつらかったこともあり、外国へ行こうと決心しました。28歳のときに、パリに渡り、美術館もたくさん巡りました。こんな絵を描きたい、描きたい、描けるかもと思うようになりました。スケッチブックを持った人についていくと、クロッキー教室でした。そこで絵を勉強することを初めて知りました。そこへこっそり通い、先生に見つからないようにしていました。ゴルバトさんという女性の先生に「線がきれい」と初めて褒められました。その先生の一言によって、画家になろうと決めました。光が見えました。「志」をもった絵をパリの人達に見せよう。日本のふるさと、伝統、黒髪の女性を見せようと。



子供の頃の中島潔氏

(2) 持続発展可能な社会の担い手として育つための人づくりや学校は、どうあるべきか、「学校教育とくに副校長・教頭が担う役割」等について

パリ国立美術学校で半年勉強させてもらいました。その後、日本に帰って絵を描き続けましたが、受け入れてもらえませんでした。そんなとき、三越がパリの美術館をつくりました。三越で展示してもらうために『源氏物語』や「金子みすゞ」・・・を描きました。三越パリの美術館での個展が成功し、清水寺の襖絵にチャレンジしました。先生から「線を褒められたこと」から線を大切にしています。先生方には、一人でもよいから、子どもに光を当ててほしいのです。本質を見つけてほしいのです。



「早朝の陽だまり」



シンポジウム

(3) まとめ

少し前に地獄の絵を描きました。地獄絵が人々の生き方を説く中に、指導者や教える人の過ちは特に罪が重いというものがあります。教えるということは人の一生を左右することだからこそ、大切に重い責任を伴うからです。

教えることは尊いことなんだ、教えることは人の一生を左右する大事な仕事なんだと思いました。

いろんなことがあると思いますけど、子どもたちのために、自身の哲学を見つけて、困難を乗り越えていく子どもたちの道を照らしてほしいと思います。

(これらの作品は男性社会の壁を乗り越え伝統的な世界に挑戦する女性たちを描いた新作です。)



「流鎚馬」



「鷹匠」



「ねぶた師」



「人形浄瑠璃」

シンポジスト 坪田 信貴 氏(要約)

(1) 「高い志 豊かな心 切り拓く未来」について

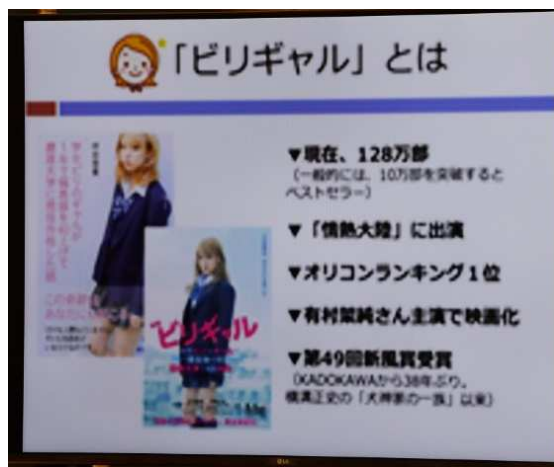
昨今、AIをはじめとした新しい技術革新により生活スタイルは大きく変わっている。それに伴い、未来を切り開いていく子どもたちが大人になるまでに何が必要なのか従来とは大きく変わってきている。

本来、「学問」や「学習」は楽しいものであり、勉強は「自信をもち、居場所をもつためのツール」である。



(2) 持続発展可能な社会の担い手として育つための人づくりや学校は、どうあるべきか、「学校教育とくに副校長・教頭が担う役割」等について

「学校が提供するサービスや役割とは何か」を再定義した方がよい。「子どもたちに向き合うこと」が最も重要な職務である。本来、学校や副校長・教頭が先生としてやりたかったことをやるべきである。



「ユヌスよしもと ソーシャルアクション」の概要発表会見

(3) まとめ

学校の再定義が必要である。学校の先生、副校長・教頭にも人生を謳歌する義務がある。

教育の原点は「こんな人になりたい」という「あこがれ」だと思う。先生たちが、「やっていて楽しそうだな」という職業になっていくことが教育の復興につながると思う。

シンポジスト 竹下 真由 氏

(1) 「高い志 豊かな心 切り拓く未来」について

竹下製菓は竹下佐七が明治27年以前に個人で菓子の製造販売を始め、私で5代目です。佐賀は森永製菓の森永太郎氏（伊万里市出身）、江崎グリコの江崎利一氏（佐賀市出身）でも有名であり、2代目社長の竹下佐八は森永太郎氏とも交流があったようです。

私は、仕事に関わるようになるまで、夢や志とはどういうことなのかを考えたことがなかったような気がします。私にとって、「お菓子をつくって売ること」が当たり前だったからです。あえて言えば、

小2の頃「ロボコン」に憧れていたことが夢や志のきっかけだと記憶しています。そのために何の勉強をしたら良いのか、家業を継ぐには機械のことも勉強しておきたい、父も機械の設計に携わっていたことなどを考え、結果として東京工業大学に進学し、家業

を継ぐことができました。夢が実現し、志に向かって行動することができたと言えるのではと思っています。私が仕事においての志というのはおこがましい気がしますが、行動の芯にあるのは「お客様・取引先・社員さんたち、そして私自身が、ハッピーになれること」ということであり、このことは今まで一度もぶれていません。そのために「美味しい・安心安全・楽しい商品をお客様にお届けする」「取引先との関係性」だったり、「働く環境」だったり、「待遇」についての整備が必要となります。お客様や社員さん、取引先の方が笑顔だと私も嬉しくなります。高い志とは言えないです

が、心の中にこの指針があると、いろいろなことが頑張れる気がしています。

「豊かな心」を育むには、次のようなことを大切にしています。私が両親からしてもらって良かったことや良かったと思う経験や環境は、今の私ができる限りではありますが、子ども達が経験できるようにしたいと思っています。外で虫を採ったり、川で魚を捕ったり、草花で花冠を作ったり、農作業体験に行ってみたり、と自然を感じられるように外に連れ出すようにしています。佐賀は自然が豊かで、子育てをするにはとても良い環境です。私自身は小さいころ、台風の前にダムからの放水が絞られると、川の水位が下がり魚が取り放題だったので大喜びで川に入っていたのですが…。今は規制が多いですが、安全性を考えながら自然に親しませていきたいと思います。

外部環境はあっという間に変わりますし、10年の間に新たな職業も生まれます。子ども達が大人になるころには、今とは全く違っているでしょう。どんな環境下でも適応できる柔軟性を持ってほしいと願っています。不条理・理不尽も多々ある、という世の常も知っておいてほしい。学校教育の場では男女平等を教え込まれていた気がしますが、社会に出るとジェンダーギャップを突き付けられます。年々改善はしていると思いますが、ギャップがなくなるのは遠い未来のように思えます。ジェンダーギャップ指数は2021年の発表でも日本は世界120位、G7中最下位です。現実を認識した上で、どのように行動していけばよいのかを考えさせたいと思っています。



竹下製菓 ブラックモンブラン

シンポジウム

(2) 持続発展可能な社会の担い手として育つための人づくりや学校は、どうあるべきか、「学校教育とくに副校長・教頭が担う役割」等について

学校の先生を志す人が減っています。教育実習に行ったら、先生になりたくなくなっただという人もいます。保護者対応（モンスターペアレント）が大変であることや管理職が大変そうに見えることなどもあるかと思います。学校はもっと夢を与える場であってほしい。そして、学校の先生はやりがいのある職業であること、「ハッピー」であることを伝えてほしいと思っています。

そのためにも保護者の意識改革など、国をあげて取り組んでほしいと思います。学校と家庭と地域の役割を明確にし、先生方の余計な仕事を極力少なくする。子ども達と向かい合う時間を確保し、子ども達の顔を見て仕事をする。そして、子ども達の成長する姿を喜び合えるような環境を整えてほしい。

また、多様な人材育成の基盤となる場であるからこそ、画一的な教育ではなく、やりたいことを伸ばせるような個別授業と集団授業の組み合わせを早期から導入した学校も選べればよいなと思います。集団授業にしても学びの深さなどで選択できればいいなと思います。徹底的に考える時間を取ってほしいと思っています。

「知る」ことはとても面白いし、「知的欲求」という言葉もあるとおり、人間だれしも持っている「欲求」の1つです。学校は「勉強」や「宿題」を楽しんで取り組める場になりうる場所です。先生方も日々工夫されているのを感じます。できたらシールを貼れると喜んで宿題をやっていたりします。子ども達が興味をもったやり方は、ぜひ全国規模で情報交換していただきたいです。

副校長先生や教頭先生といった方々には他校の情報をしっかりと集め、どこにあっても「これがうちのカラーです。」と言い切れる指針を校長先生が出せるように動いていただければ幸いです。



(3) まとめ

不平等を知らない授業だけ受けていると、社会に出たときの不条理・理不尽に出会ったときが大変苦勞します。女性というだけで受けるジェンダーギャップを体験しました。何で私ばかりと不平等感もありましたが、それをチャンスととらえることで、女性だからこそできることや女性の社長ということで取材を受けるチャンスもありました。実際の世の中にはいっぱい不平等や不条理があって「なんで自分が」と思うことがある。そのとき、どう捉えてどう乗り越えていくか、今のうちにぜひ子ども達にもいっぱい考えさせてほしい。

考え方一つで前向きにやっていけるし、チャンスにすれば自分はどんなものにもなれる。どんな性質、特性だって固有の個性で武器になります。私も子ども達に伝えていきたいし、先生方にも子ども達に声かけしていただけたらと思います。